

小川 軽舟選

西村 和子選

井上 康明選

片山由美子選

蒲公英やかつての家へ猫帰る
姫路市 宗平 真実

風を映して雪晴の春障子
加須市 萩原 康吉

そのかみの水争ひの堤焼く
長浜市 中島 正則

菜の花や沖にタンカー行き交ひて
土岐市 水野 雅子

△評▽その家が、そこでの暮らしが、猫は好きだったのだ。独りで帰ってきたのだろうか。猫には猫の物語が紡がれる。
帯広市 柏木 七歩

△評▽障子越しの春の日差しと雪の明るさによって、わずかなけりやほのかな動きが風の形に見える。微妙でこまやかな句。
相模原市 はやし 央

△評▽くらがり峠は奈良から大阪へ通ずる峠。峠を越えた安堵に、ウグイスの声が聞こえてくる。山に降る雨はしづかに龍太の忌
奈良市 上田 秋霜

△評▽黄色い菜の花と青い海の対比が春らしい美しさだ。その沖にはタンカーが見えて、一句の構成に遠近法が用いられている。
東京 渡邊 顯

白波に抗ふ渡船運き春
佐世保市 相川 正敏

△評▽いつも見ているはずの子の手の変化に気づくのは、こんな折だ。中学も高学年の子か。
神戸市 岸下 庄二

三月やネクタイ選ぶ父と子と
倉敷市 中路 修平

△評▽校が見えなくなるほどびっしり花をつけるミモザ。上五・中七がその様子を描写している。
平塚市 門脇 明子

雪壁の挟む歩道や春浅し
青森市 天童 光宏

カーテンの裏に絶れる春蚊かな
大阪市 立川 六瑚

誓子忌の駅頭に買ふスポーツ紙
東京 望月 清彦

また明日手を振りあへる遅日かな
平塚市 正好 浩

三寒の散歩四温の読書かな
下関市 磯部 秀幸

瀬戸内の海のがよふ梅見かな
大阪 池田 壽夫

空に散るあまたのからす蠶晦
東京 伊藤 公一

春一番竹林波のごとく揺れ
東京 郡司 正男

二人しかいらぬ風呂や春の雪
鎌倉市 佐々木 真

相槌を打つも介護や梅ひらく
交野市 近田 弘子

大縄を跳ぶ足音や地虫出で
朝倉市 島井てんせき

大空に鷹を放てる燃野かな
瑞浪市 岩島 宗則

風花に両手かざす子都会の子
横浜市 田中 満

鳴に窓開け朝のジャズミニティ
東京 徳原 伸吉

野遊びや木登りの子等脚長き
羽生市 岡村 実

バス停に道る川の名春寒し
北九州市 宮上 博文

料峭や子の名を呼びてやまぬ声
三鷹市 羽継原田丘

まんなかの花の明るき古墳道
龍ヶ崎市 小宮 光司

帰るゆけ万羽の鳥や春夕べ
東京 山口 照男

身の籠のゆるみし日なり春の雲
奈良市 奥 良彦

手術待つ空に星降きて
神戸市 尾野絵里佳

奈良市 奥 良彦

佐倉市 松戸 文彦

加古川市 中村 立身

毎日俳壇

<句集>

◇『新装版 鮎山實全句集 鮎山實生誕100年を機に刊行された本書はまさに待望の一冊と呼ぶにふさわしい。社会性俳句全盛期に刊行された第一句集には入らずりと顔斑雪に火焚きストは夜へへんのぼる百合さくらと子が歩きたすののような青春と社会への想いの濃い作品が並ぶ。しばしの断筆の時代を経て八小鳥死に枯野よく透く籠のこゝろへ金魚屋のとどまるところ濡れにけりなるの端正でクラシックな第二句集『少長集』で俳壇を驚かせた。その後は八比良ばかり雪をのせたり初詣子へはじめから川の自慢や鮎合せなどゆったりとしつつ大きな作品を発表し、第五句集『花浴び』では八残生やひと日は花を鋤きこんで命と触れ合っているような句を詠むに至った。鮎山實という人生が詰まった必読の書。(朔出版・1760円) (俳人・西村麒麟)

新刊

<歌集>

◇栗木豆子・穂村弘・佐藤二生・千葉聡・石川美南編『百人一首バトル』選者5人が個性をいかして設けたテーマで、現代短歌から100首の秀歌を選んで短歌の魅力を伝える。△ホメロスを読まばや春の潮騒のとどろく窓ゆ光あつめて 岡井隆▽(書肆侃房房・2310円) △大口玲子『スルスムコルタ』題はカトリック教会で唱えられる文句で心を高く上げよを意味するラテン語。2024年の作品を取録△これ以上ないほどの青さのなるか息子の居ない官崎の空▽(ふらんす堂・2745円) △兵頭なぎさ『海』第二歌集。中に出てくるターナーやゴッホ、ラファエロ絵画など、かつて絵を描いていた著者の美しい色彩と構図で捉えて詠む。△ラファエロの雲やはらかしわがうへの空の遠近ふかく彫りつつ▽(ながらみ書房・2070円) (歌人・中川佐和子)